9. 骨シンチグラフィーによる子宮癌の insufficiency fracture の検討

阿部　裕之　小川　芳弘　丸岡　伸
中村　護　坂本　澄彦　(東北大・放)

1984年から1989年に当院にて放射線療法を施行した，あるいは施行中であった子宮頸癌75例，子宮体癌4例，計79例(年齢は30歳～80歳，平均61.8歳)の骨シンチ，CT所見から，照射野内のinsufficiency fractureの頻度，年齢分布，好発部位について検討し，さらに骨転移との鑑別についても考察した．照射野内にinsufficiency fractureが起きたのは27例(34.2%)であり，いずれも50歳以上，平均年齢は66.4歳であった．好発部位は仙腸関節，次いで仙骨上部であった．CT所見から病変部の骨折線の有無，周囲軟部組織腫瘤の有無，骨破壊像の有無等を検討することにより，insufficiency fractureは骨転移と鑑別可能であると思われた．

10. 前立腺癌の骨転移——核医学診断と MRI——

清野　修　星　宏治　景山　和廣
鈴木　憲二　片倉　俊彦　木村　和衛
(福島医大・放)

前立腺癌7例について，MRIによる癌の骨・骨髄転移の検出能を評価することを試みた．骨転移の判定のため，同時期の単純写真や，X線CT，^{99m}Tc骨シンチ検査の所見と比較した．MRIは骨髄転移の検出が可能と考えられ，骨シンチで検出されない場合でも，MRIでは骨髄への転移所見が描出できることが示唆された．前立腺癌のMRI読影において，同時に撮影される骨所見の評価も必要であると考えられた．

今後，癌の骨髄転移に対する，MRとRI検査(ことに骨髄シンチ)の感度・特異性・正診度などの観点から評価していく予定である．

11. インビトロ検査による HBe 抗体値のメーカー間差異について

堤　玲子　佐藤とし子　山口　昂一
(山形大・放)
新沢　陽英　(同・二内)

現在，HBe抗原・抗体測定用RIAキットは2社(第一，ダイナボット)から供給されているが，両者とも測定原理は同じであり，抗体値は中和抗原に対するビーズ抗体と血清抗体の競合反応を利用して求める．

第一キットで抗原，抗体共存の値を示した急性肝炎，慢性肝炎，肝硬変，肝癌および無症候性キャリアを母親に持つ子供の検体をダイナボットキットで測定したところ，陽性率は前者で44%にたいし後者では5%にしかならなかった．この解離現象は抗原陰性例では顕著ではなかったので原因を知る目的で，①中和抗原の交換(第一，ダイナボット，抗原陽性患者血清)，および②検体希釈実験を行った．

その結果，共存例においては中和抗原の交換により抗体値が変化し，しかも希釈曲線のプロフィルはメーカー間に差が認められた．以上の結果からHBe抗体には患者間に反応性の不均一性があり解離現象として現れた可能性がある．

12. RIA によるメタネフリン・ノルメタネフリン測定の臨床的意義

塚本江利子　伊藤　和夫　中駄　邦博
加藤千恵次　永尾　一彦　古舘　正従
(北大・核)

メタネフリン，ノルメタネフリンは，それぞれアドレナリン，ノルアドレナリンの代謝物であるが，他のカテコールアミンと同様に褐色細胞腫でその値が上昇することが知られている．現在，カテコールアミンは，HPLCで定量されているが，今回，メタネフリンおよびノルメタネフリンのRIAキットが発売され，少ない検体量で簡便にこれらの定量が可能になった．また，これらの検体は，従来，24時間の塩酸蓄尿により得られていたが，クレアチニンを同時に測定することにより，随時尿による測定も可能になった．さらに，塩酸を添加しなくとも，測定値は変化しないので，採尿も容易で，外来における褐色細胞腫のスクリーニングに応用できると期待される．

Presented by Medical*Online